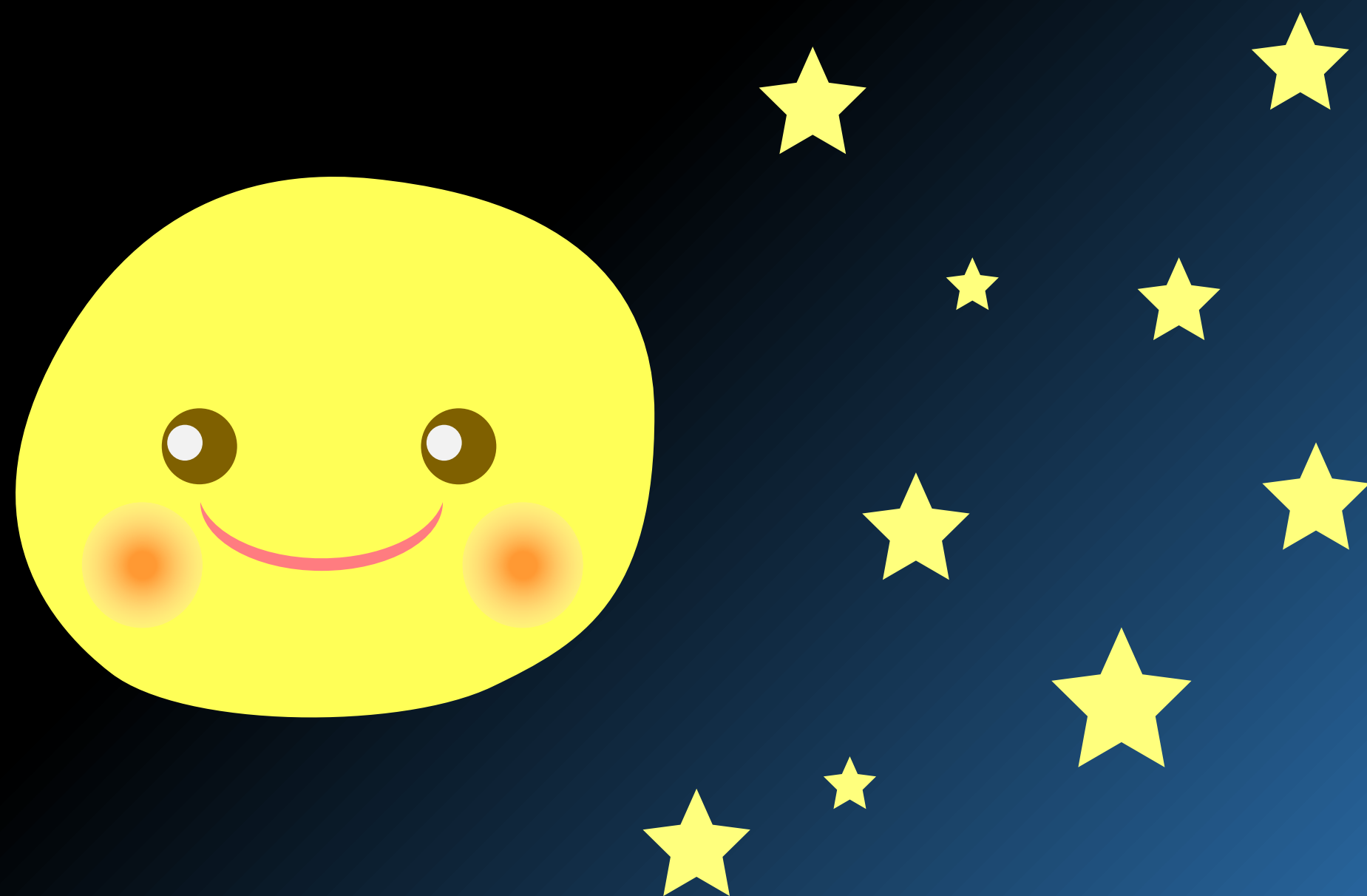


ひとりぼっちの  
お月さま



お月さまとお星さまたちは  
暗いお空で仲良く暮らしていました。



ある時、お星さまのひとりが言いました。  
「お月さまだけ、丸くて大きくて  
夜空を独り占めしてずるい！」  
すると、他のお星さまたちも、言いました。  
「そうだ、そうだ」



「ずるい!」「あっちいけ!」「邪魔だ!」  
と、言われるけるうちに、  
お月さまは小さくなっていきました。



そしてある時、お月様の姿が、  
見えなくなりました。  
お星さまたちは、「お空が広くなった」と  
楽しそうに、遊んでいました。

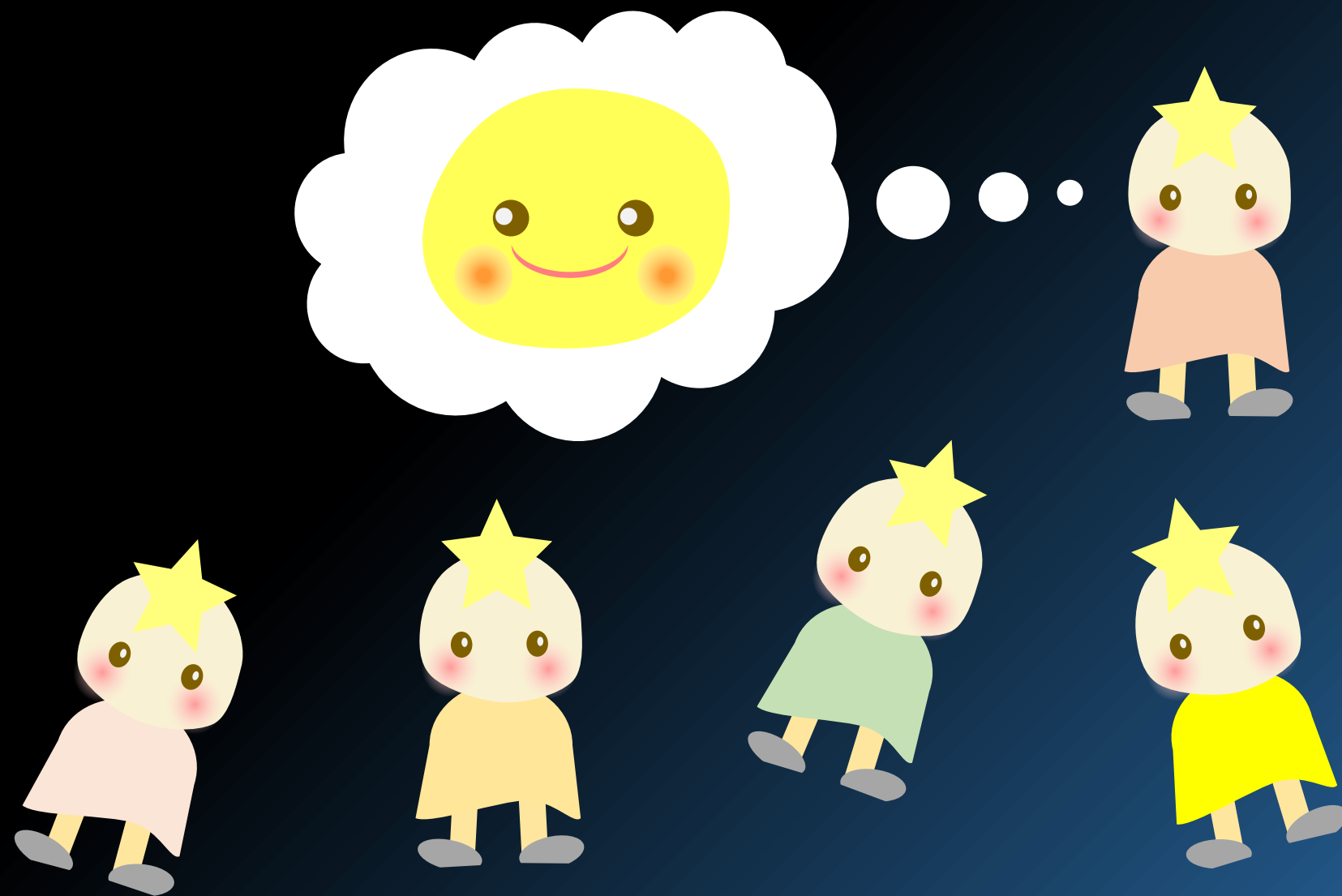


お星さまのひとりが言いました。

「お月さま、どこに行ったんだろう？」

他のお星さまが言いました。

「でも、これでみんな一緒だよ」



大きなお月さまがいなくなると  
お星さまたちが、  
よく見えるようになりました。  
そして、お星さまにも、いろいろな形や色  
があることに気づきました。

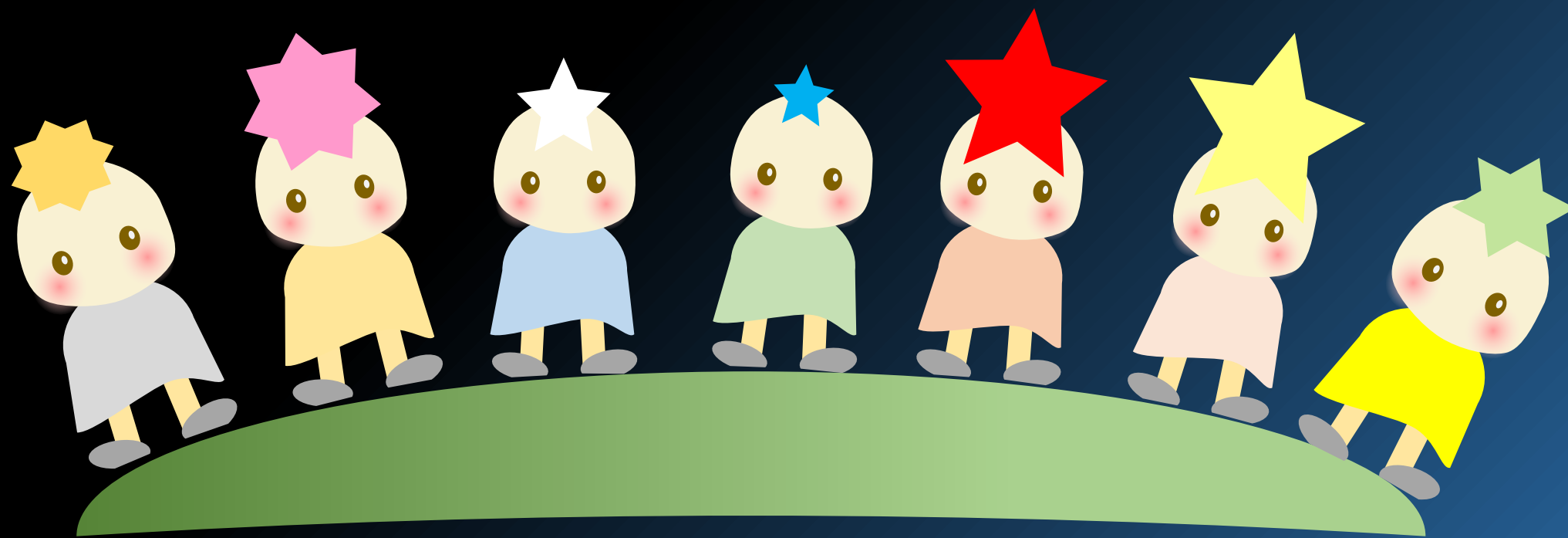


あれ、僕たちって、同じじゃない。  
みんな、色も形も違うんだ。  
お月さまだけが、違ったわけじゃないんだ。





僕たちは、色や形が違ってても友達だよね。  
だったら、お月さまも、友達だよね。  
僕たち、ひどいことしちゃった。  
お月さまを、探さなきゃ！



そんなお星さまたちを見ていた  
フクロウ先生は、こう言いました。  
「いいことに気づいたね。  
みんな違っていいんだよ。  
違うから、素晴らしいんだ。」



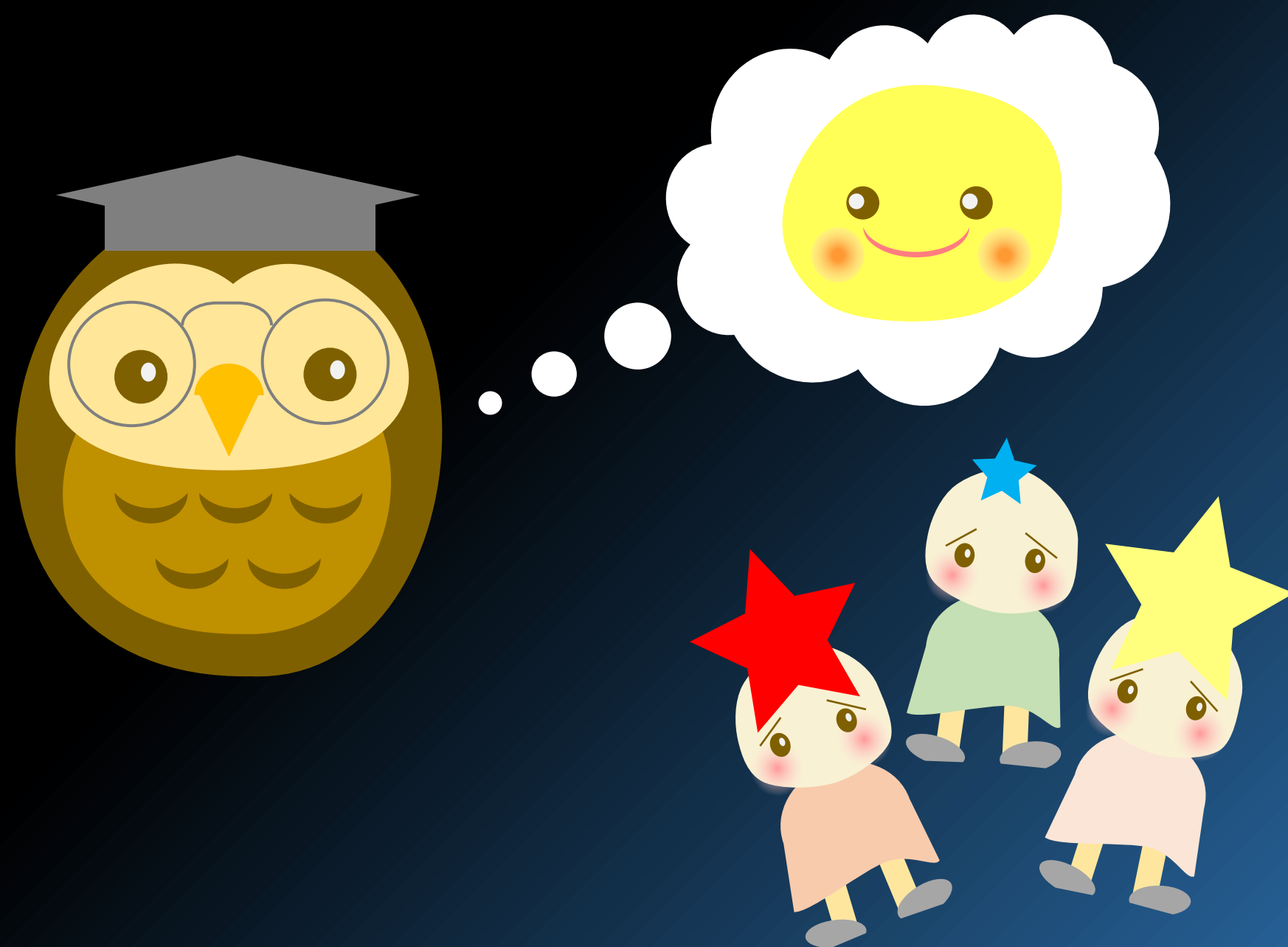
「僕たち、みんな一緒じゃないと  
いけないって思ってた」

「僕たち、お月さまを仲間外れに  
しちゃったんだ」

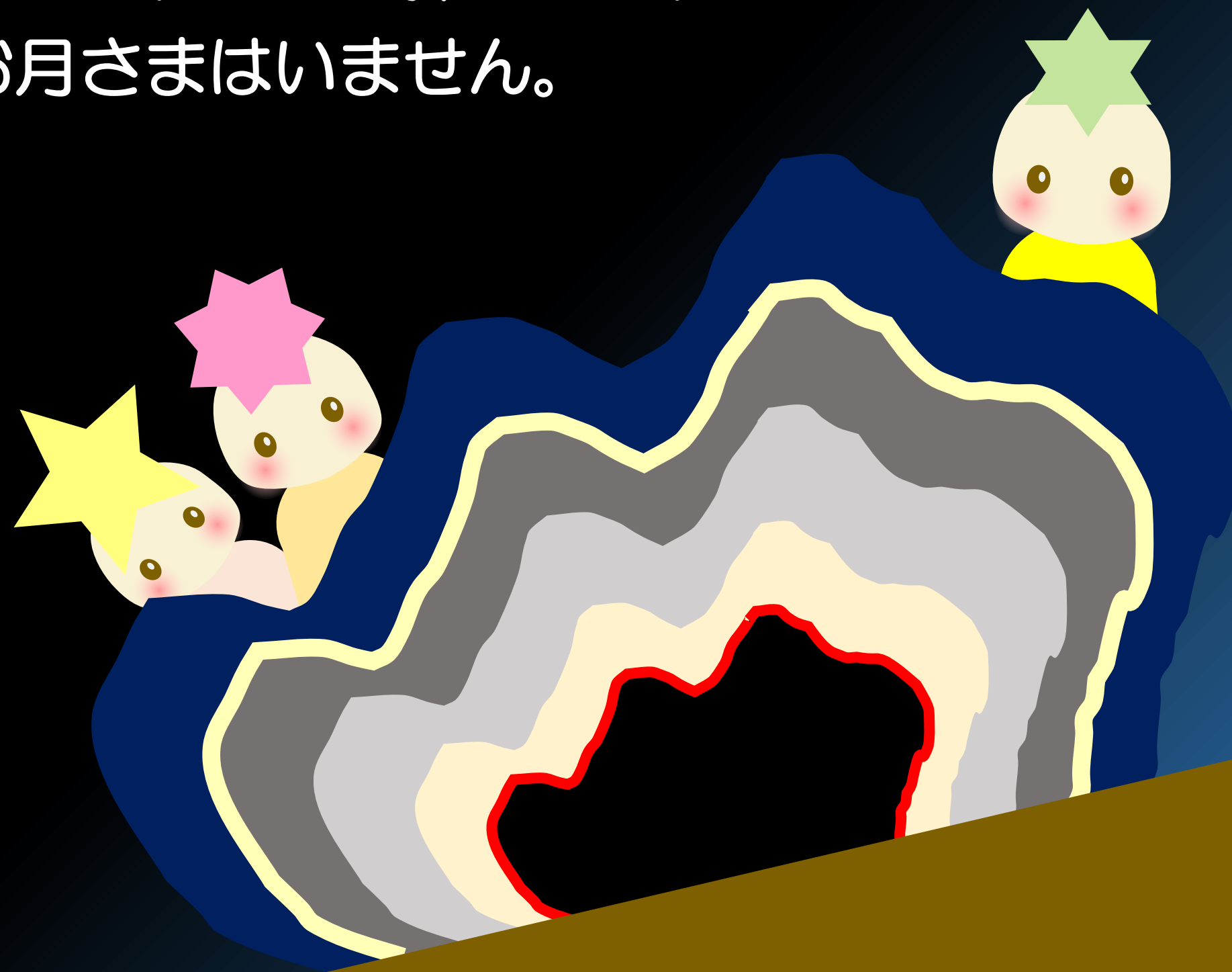
「だから、謝りたいんだ」



フクロウ先生は言いました。  
「みんなで手分けして探してごらん？  
お月さまも、みんなに会いたいはずだよ」



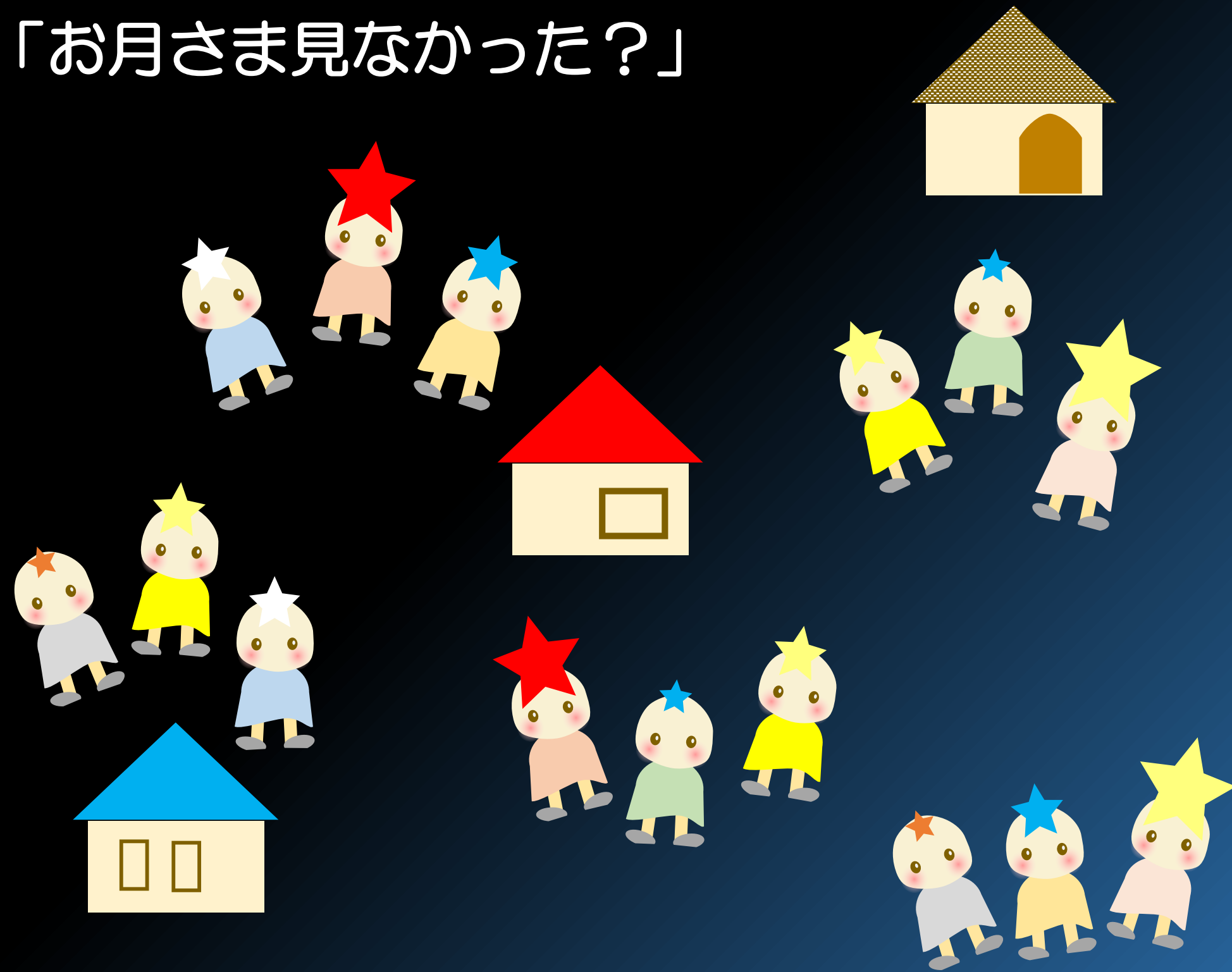
「お月さま、いませんか？」  
お星さまたちは、手分けをして、  
探し始めました。  
だけど、どこを探しても、  
お月さまはいません。



お星さまたちは、お空を探し始めました。

「お月さま知らない？」

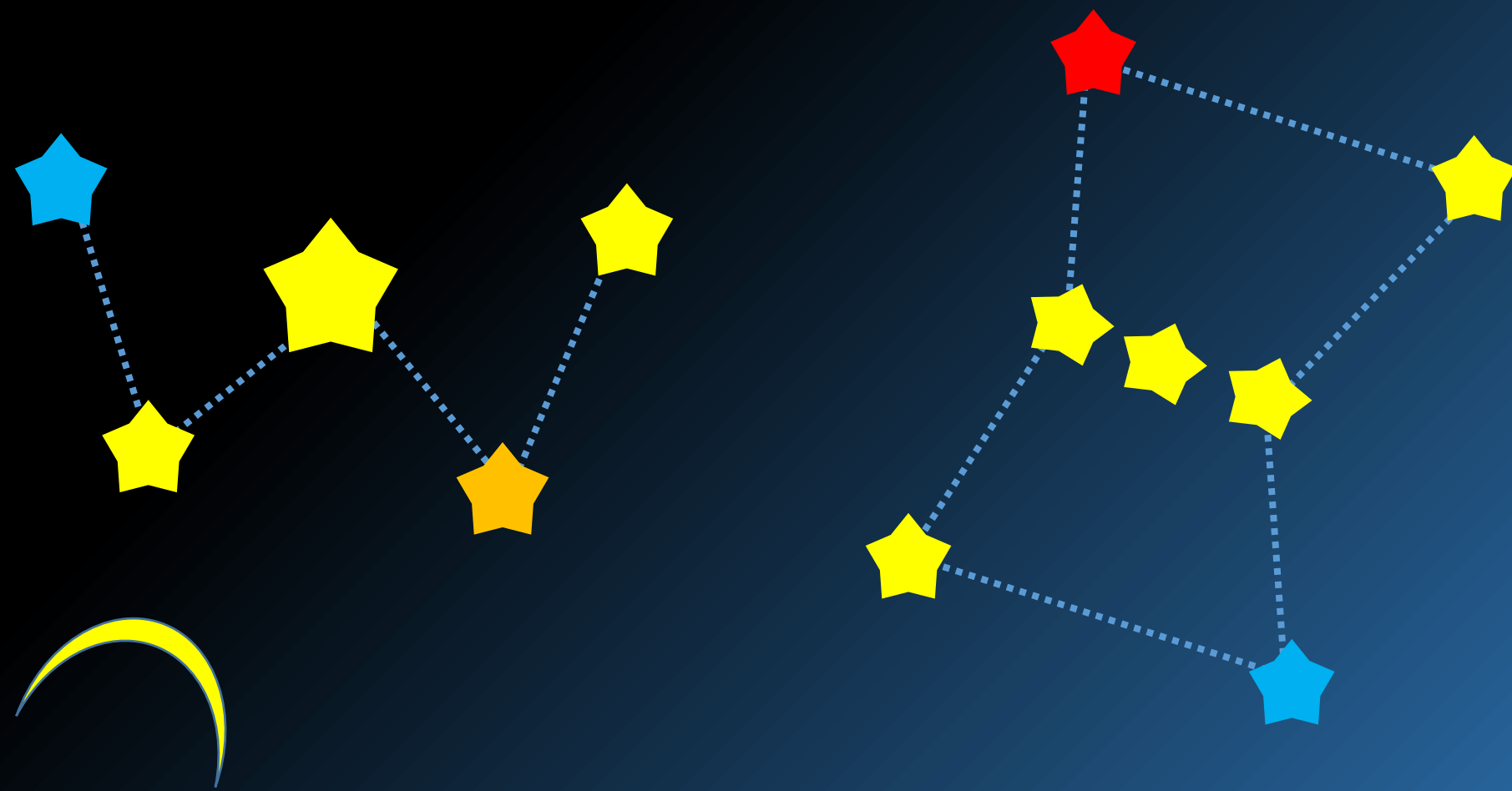
「お月さま見なかった？」



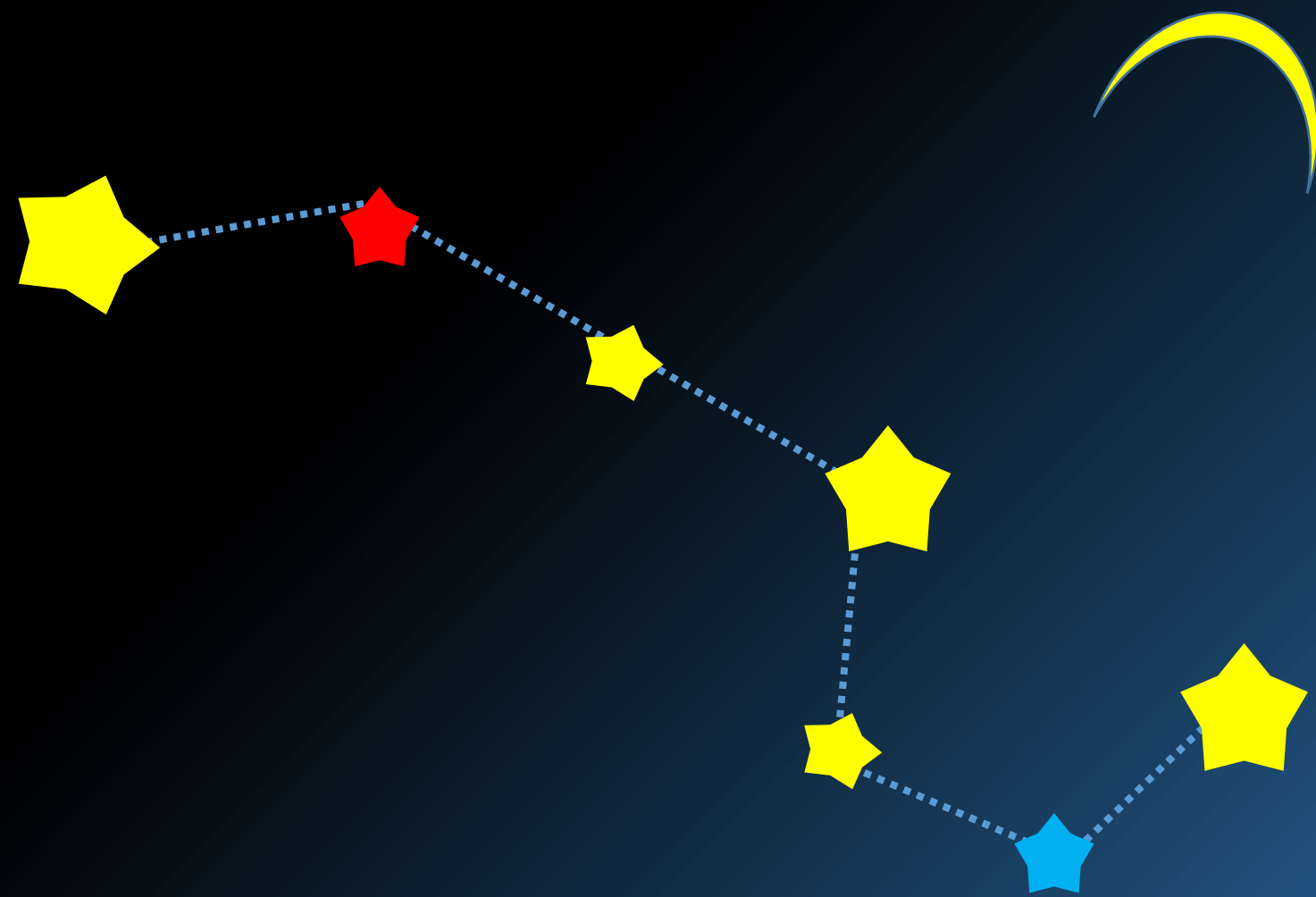
その頃、お月さまは、目立たないように  
体を細くしたままで、夜空の星座の中に  
隠れようとしていました。

でも、星座たちはこう言いました。

「星座が壊れちゃうから、あっち行って。」



北斗七星のひしゃくの中に入れても  
「じゃまだからあっち行って」と  
追い出されました。





僕はどこに行っても嫌われ者。  
ひとりぼっちなんだ。  
お月さまは、大きな涙を流しました。



その涙は、お空に雨を降らせ  
お星さまのもとにも届きました。そし  
て、お星さまは、お月さまを見つけるこ  
とができたのです。



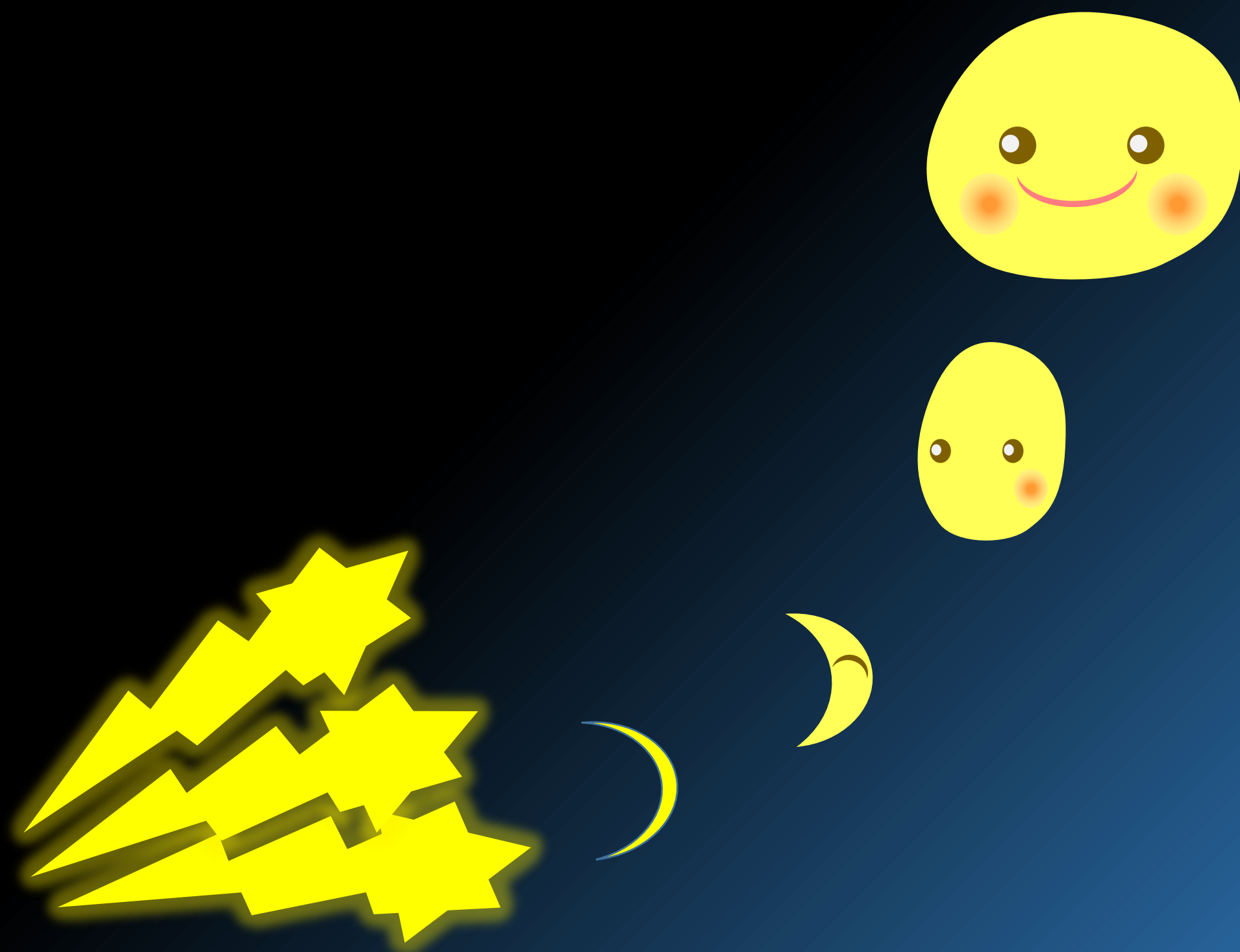
「僕たちが悪かったよ」  
「お月さまがいなくなってから  
みんな違うって気づいたんだ。」  
「お月さま、丸くても、大きくても友達だ  
よ。」



僕たちが、仲間はずれにしたから  
お月さま、小さくなっちゃったんだね。  
僕たちが、お月さまに  
光を分けてあげよう。



お星さまの光をもらって  
お月さまはだんだんと元気を取り戻しまし  
た。



お月さまが丸くなるにつれて  
今度はお星さまが、輝きを失っていきまし  
た。

お星さまはいいました。

「今度には僕が、光を分けてあげよう」



こうして、お月さまは  
お星さまに光をもらって丸くなり  
お星さまは、お月さまに光をもらって  
輝くようになりました。



お月さまとお星さまは  
お互いに光を分けながら  
仲良く空を照らすようになりました。





月が満ち欠けをして  
新月の日には満点の星  
満月の日には  
星がよく見えなくなるのには  
こんなお話が合ったのです。

